

# 特集のとびら

## 「基礎学力の定着を図る」

教育研究所主任指導主事 坪井政彦

「基礎が大切」、よく言われる言葉である。基礎とは「それを前提として全体が成り立つもの」である。すれば、基礎学力とは「全ての学習の土台となり、学習を成り立たせる前提となる学力」である。こう考えるとそれは「読み、書き、計算」ということになる。

江戸時代に庶民の教育を支え、「読み、書き、計算」の力を育てたのは寺子屋である。江戸後期の日本での識字率は50%に達し、当時の欧米の水準をはるかに超えていたという。極めて高い世界最高レベルの教育水準である。寺子屋では「読み、書き、そろばん」の手習いの徹底が大事な目的であり、それは誰にでもいつでも門戸が開かれていた。それが当時の高水準の教育を支えたと言えよう。同時にその教育方法や内容においては、十分に個に応じた教育がなされていた。師匠は、学びに来ている子ども（筆子）に応じて手本を書き与え、個々の学習状況を判断し適切な課題を与えた。また筆子の個性・適性を見て将来の道を示唆し、必要な知識や技能を与えたという。師弟の信頼は深く、さいたま市内にも筆子たちが師匠を慕って立てた筆子塔が多く残されている。

今さいたま市では、「生きる力」をはぐくむ『潤いのある教育』の実現のため、「基礎・基本の徹底と個性を生かす教育の推進」を掲げ、「学びの向上さいたまプラン」を推進している。確かな学力をはぐくむ基礎・基本としては「基礎学力定着プログラム」を示し、国語、算数・数学の達成目標を設定した。また、書く活動を重視し思考力・表現力を高めるための「さいたま市国語力向上プラン」も進めている。さらに、個に応じ、個を生かすための「少人数指導」「学校図書館教育」「環境教育」「健康教育」等の充実にも取り組んでいる。これらは基礎の徹底と個に応じた教育に重きを置いた「寺子屋の教育」とも通じるものがある。目指すべきは一人ひとりの子どもを伸ばす教育である。